

われわれは単なる消費者以上のものである

ブレンダン・ラヴェットが『殺すためではない竜』を1989年に書く動機となったのは、あらゆるもの——人々をも含む——を商品化しようという、とどまるところのないメディアによるキャンペーンを見たことだった。

アロ・コンノートンによるブレンダンへのインタビュー

Q. 一番最近の著書『殺すためではない竜』で取り組んでいる主な問題は何ですか。

A. 全体を統一する問題はただ一つ、真の人間の開発発展を解明することです。30年以上にわたり、現代の開発に付与された意味は徹底的に誤っているという確信が大きくなりました。われわれは人間的に望ましいものの定義を誤ってきました。幸福をどう実現するかについて現在浸透している「知恵」は間違っています。

Q. どうしてその結論に達しましたか。

A. 特に二つのことがあります。今の世界で貧困にあえぐ人々がこんなにも多いこと、そして環境が急速に破壊されていることです。こうしたことは現代の開発プロセスがもたらしています。

Q. わたしたちのほぼ全員が誤った進歩の考えを受け入れてしまっているということですね。

A. そうです。現在の「開発」の言葉の使い方は1949年からありますが、その基本的傾向はそれ以前に遡ります。何世紀もの間、西洋世界は経済的価値を、他のあらゆる本質的な人間的価値を犠牲にして支配的価値とする方向へ進んできました。宗教的価値が奨励するものと、経済的価値が常に疑問の余地なく最優先される文化で促進されるものとは、ほとんど全面的な矛盾があります。そのような状況では、既存の宗教的伝統は先鋭的になるか、あるいは見る影もないようになるかのどちらかです。

Q. そういう見方をする人はあまり多くないのではないのでしょうか。結局何が「善い」かは、誰が決断するのでしょうか。

A. 難しい問題は、われわれが善についての決断にどう達するかということですね。普遍化させるような道徳観が押し付けられると人々は当然反発します。その一方、差異のあることを単なる偶然であるかのように取り繕っても何もならないでしょう。そうすると命をゲームとみなすことに容易につながります。ゲームでは自分自身で決定・選択するのに世の中の現実には直面しない。世の中はひとつの明白な価値観で支配されています。そしてこの価値観が、多くの者が悲惨な状態で暮さねばならない世界を造っているのです。

Q. 進歩として提示されるものは、実際は貧困化であることがよくあると考えますか。

A. そうです。自動的な進歩などというものはありません。経済は——または他のどんな社会的システムでも——疑問の余地ない制度として機能するままにすべきではないです。経済は、文化的プロセスが他の優先事項として決定することの範囲内に一体化されるものでなければなりません。たとえば経済が人々や環境に対して持つ影響と同様にです。今日、4兆ドルものお金が電子の速度で世界中を駆け巡り、投資家の博打的思惑によってのみ「制御され」、何百万もの人々の生殺与奪を握っているのです。

Q. そのような現実に直面し、多くの善意の人々がどうしようもないと感じています。何ができるのでしょうか。

A. まず信じるべきは、われわれは物事の「本質を見通す」よう生まれついていることで

す。それはわれわれの尊厳であり権利です。次に恐らく、「物事をやり通す」ためにこそわれわれは生まれたと信じなければなりません。人間としてのわれわれに有利となる唯一のこと、それは自己修正する、継続する学びのプロセスですが、そのプロセスにコミットすることで物事をやり通すのだと信じるべきです。大規模で長期にわたる「誤り」に直面した時、われわれはもちろん、控えめに言えたいへん困惑します。最も必要なのは、[その誤りによって] 被らされた損害について痛みを感じるほどの知識を自分自身で知る勇気、そしてその被害と共に生きる勇気です。その痛みは、どんな対処手段を取る必要があるか見定める力をわれわれに与えます。そうさせてくれるまでその損害について知ることです。全体化を目指す経済システムがメディアはじめあらゆるものを支配するので、人々は何のために生命があるかについて唯一の見方で朝に昼に夕に攻め立てられます。代わりの考え方をする余裕を見つけるのは非常に困難になります。多くの人々は「これが物事のありかただ」という作り話を信じ込む。いまのわれわれには現在の窮状に対する思いやりある理解と希望する勇気の両方が必要です。それは自分たちのうちにある命を信じることから生まれるのです。

Q. それでは経済価値の優先を無意識的にでも受け入れることがわれわれの信仰実践にも影響を及ぼすということでしょうか。どのようにそうなるのでしょうか。

A. われわれの出発点が「これが物事のありかただ」というなら、宗教的祝福やシンボルのすべての理解はこの変更不可能な状態に合致するよう、静かに適応させられることになるでしょう。こうした程度まで宗教的シンボルはその実際の意味を無にさせられてしまいがちです。信仰は、われわれ自身の生きる時間において命に対する責任をもつことを伴うのです。この責任を負うことを拒否するなら、信仰によって宗教的伝統が意味してきたことは死んでしまいます。熱心な信徒にはその生活の中で、自分たちの根拠をもって生ける神の大切さの相対化を拒む人たちがよくいます。そういう人々は今日「原理主義者」のレッテルを貼られます。

Q. 政治問題が議論される際は特にそう言えることです。信仰の議論については政治的決断の場の入る余地がないという人々がいます。

A. ニコラス・ラッシュ（訳注1）の言葉を借りると、あらゆる偉大な宗教の教えは「偶像崇拝に反対する手順書」として読むことができます。宗教は政治・経済・社会システムと非常に関連性をもつようになっています。政治・経済・社会システムが正義の要求するところを超えた位置に置かれ偶像崇拝的になっているからです。最近サミュエル・ハッチンソンは、将来の戦争は「文明の衝突」の結果生じるだろうと主張しました。イデオロギーの違いによる戦争はもう終わり、今や世界でただ一つの経済システムだけが機能しているからだといいます。こうした理論が現れるのは経済に絶対的な優先度がある時です。文化的多元主義を現代の諸問題の原因とすることは、並外れて道理に反しているとわたしにはみえます。そうすれば現代世界の根深い緊張の本当の原因を覆ってしまうこととなります。それは、制御されない経済システムのしわざがあらゆるところで人間共同体を弱体化させる、そのやり方です。

Q. 文化が中心的な要素だと主張されます。どういう意味ですか。

A. なにも旅行者の歓心を得るような事柄を考えているわけではありません。それは文化の産物です。文化について語る場合、わたしはそのプロセスのことを言っています。それは、人間が周りの世界に名前を付け、何が人間的に価値のあることか自ら決定することで、自分自身を実現するというユニークな活動のことです。自分にとっての物事の意味を誰かほかの人に決定されるままにしてしまう、たとえば生きる意味はもっと多く消費することにある、などのように言われるままにしてしまう時、文化は弱められ、人々は人として矮小化されます。

Q. キリスト教はあなたの表現する世界のどこに収まっていますか。

A. もし私の基本的な分析が正しいなら、答えは全く収まってはいないのだ、ということになります。どこにも所与の場所はありません。むしろ死の恐怖に支配されない命を生きることによって、その場所を創り出さなければなりません。ほんものであることを求めて奮闘努力することがわれわれの世界にとって重要であることを信じなければなりません。ほんとうの希望とは、人々が虚無感のような自分の心の一番底にある感情に注意を払って、それに応えることでしょう。キリスト教のシンボルが教えてくれるのは、われわれは「記憶する」民であるということです。われわれに他者の苦しみのお話を忘れさせようとする者たちに抵抗しなければなりません。自己利益のみの追求、周囲の世界に無神経になることを強いるような者たちに抗わなければなりません。

Q. 善であることと宗教的であることは結び付かないと今日よく言われます。

A. おそらくそれは「宗教的である」が何を意味するかによるものです。欧米で今日非常に求められているように見える種類の宗教は、J. B. メッツ（訳注2）によって「神不在の宗教好き(pro-religious godlessness)」と名付けられています。メッツによると宗教的神話やシンボルはいまだに人々を魅了するのに、こうしたものが推進するのは幸福ではなく、回避することだと言います。まるでわれわれの探し求めるものは神秘との関係よりも気楽さであるかのようなようです。現在のわれわれがもつ人間の価値の考え方は、空から落ちてきたものではありません。それはキリスト教の伝統に負っているのです。われわれの考えから神を除外しても存続するような伝統ではありません。あらゆるものの商品化の動きは人々をも対象にするようになっていきます。商品の市場では、われわれはすべていとも簡単に取って代わられます。[文化の] 中心に神秘を見ることができない人々は、互いのうちにある神秘との関係を維持することに困難を感じるでしょう。

聖コロンバン会のブレンダン・ラヴェット神父はマニラで神学の教鞭を取っている。バーナード・ロナガンの長年の弟子で、数冊の著作もある。

訳注1：ニコラス・ラッシュ(Nicholas Lash)：イギリスのカトリック神学者(1934～)

訳注2：J. B. メッツ(Johann Baptist Metz)：ドイツのカトリック神学者(1928～)